

奥山廃寺（奥山久米寺）の調査

—第204-7次

1 はじめに

今回の調査は個人住宅の建設にともなうものである。調査地は奥山廃寺（奥山久米寺）金堂の約50m北に位置する（図168）。奥山廃寺はこれまでに、塔、金堂、西面回廊などが調査され（『藤原概報 3』、『同 18』、『同 20』など）、7世紀前半に造営された古代寺院であることが判明している。本調査区はその寺域内と想定され、奥山廃寺に関わる建物等の遺構の存在が予想された。

調査区は南北4m、東西7mで調査面積は28㎡である。調査は2020年11月16日から開始し、11月26日に終了した。

2 検出遺構

本調査区の基本層序は、①近現代の住宅にともなう造成土（厚さ40～90cm）、②暗褐色粘質土（古代～近代の包含層：厚さ5～30cm）、③炭混暗褐色砂質土（古代の整地土：厚さ20～40cm）、④黄灰色砂質土（古墳時代以前の整地土もしくは堆積層：厚さ10～20cm）、⑤地山（黄灰色シルト）の順である。遺構は、③層（標高94.50m）および④層（標高94.40m）の上面で検出した。

調査の結果、土坑1基、斜行溝1条、溝状遺構1条を検出した（図169）。これらの遺構は検出面が異なり、土坑SK405が古代の層である③層、それ以外は古墳時代以前の層である④層で検出している。なお、③層は調査区西北部でより厚く堆積することから、北西に向かって落ち込む旧地形を平坦にする整地土とみられる。

土坑SK405 やや不整形な隅丸方形を呈する土坑である。直径1.1m、深さ0.6m。埋土からは古墳時代後期から古代にかけての土器が出土した。

斜行溝SD406 調査区東南部で検出した小溝。幅20cm、深さ15cm。埋土から須恵器の大型甕などが出土した。古墳時代の遺構の可能性はある。

溝状遺構SX407 調査区北辺部西半で検出した。幅20cm以上、深さ20cm。遺構の大半が調査区外で全容が不明だが、溝もしくは落込みの可能性はある。埋土から5世紀の土器が出土した。

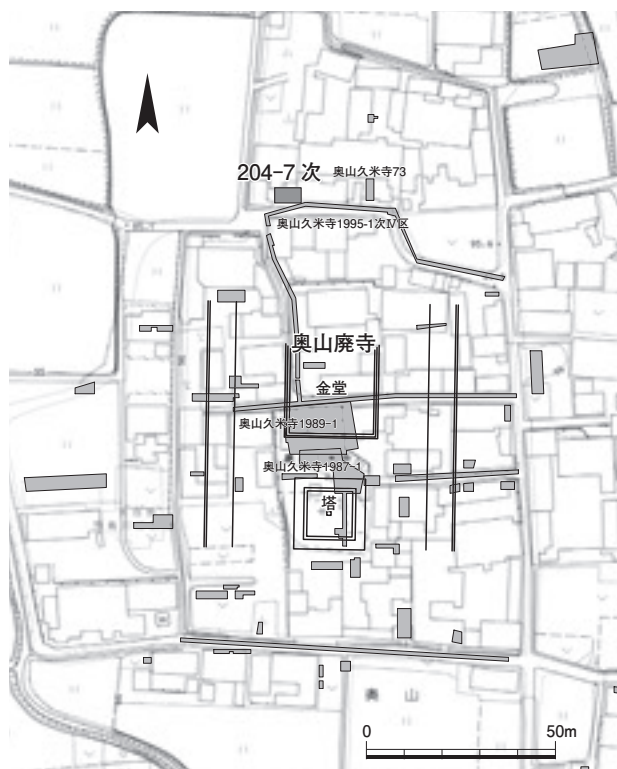


図168 第204-7次調査区位置図 1：2000

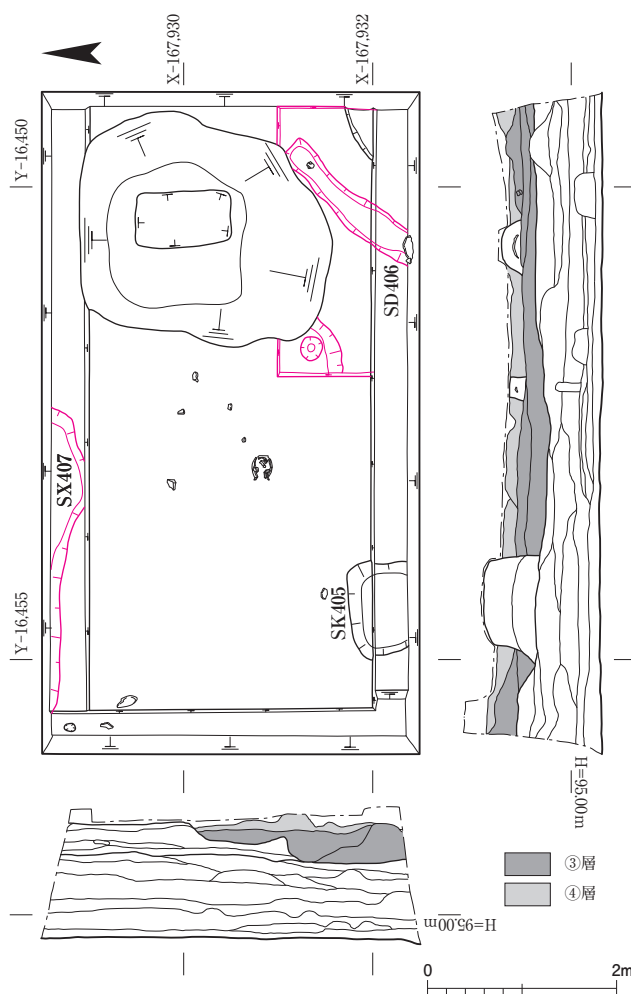


図169 第204-7次調査区遺構図・南壁・西壁土層図 1：80

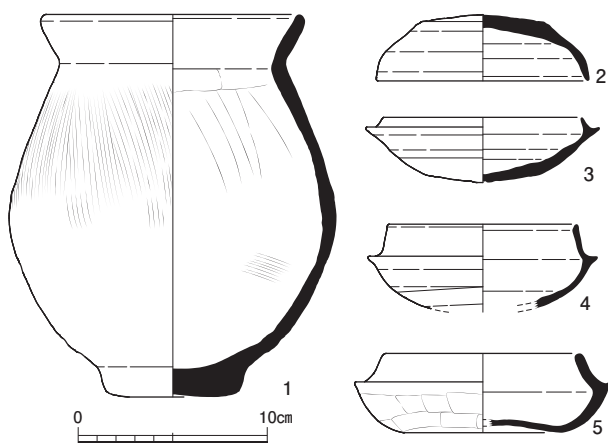


図170 第204-7次調査出土土器 1 : 4

3 出土遺物

瓦 類 本調査区からは、丸瓦39点 (5.6kg)、平瓦176点 (1.1kg)、不明瓦製品 1 点が出土した。胎土・焼成から古代と判断でき、奥山廃寺所用と考えられる。なお、瓦の出土は大半が①・②層からであり、③層からはごくわずかである。④層からは瓦は出土しなかった。

(石田由紀子)

土 器 整理用木箱で 3 箱分が出土した。土師器、須恵器、近代の土製品などがあり、古墳時代や古代のものを多く含む。土坑SK405や古代の整地層である③層からは 6 世紀を前後する時期の土器と古代の土器が、最下層の溝状遺構SX407からは 5 世紀の土器が主に出土した。

図170-1は土師器甕である。平底で外面はハケ目、内面は下半をハケ目、上半をケズリによって調整する。③層上面で横倒しになった状態で出土したが、掘方は検出されなかった。2・3は須恵器杯Hである。2は復元口径11.3cm、3は外端径12.4cmを測る。飛鳥 I に位置づけられる。4も須恵器杯H。復元外端径は12.2cmで、底部外面にはロクロケズリを施す。ロクロは反時計回り。TK23～TK47型式に比定できる。2～4はいずれも③層出土。5は溝状遺構SX407から出土した須恵器杯H。外端径13.6cmを測り、単位の短い手持ちケズリをおこなう。TK216型式に位置づけられる。

(木村 理)

鍛冶関連遺物 ③層から轆羽口 1 点、椀状滓を含む鉄滓 6 点 (281.30 g) が出土した。図171は轆羽口で残存長5.2 cm、残存幅5.0cm、厚さ2.3cm。端部外面は被熱によって黒色ガラス質化する。内外面はナデによって整形し、被熱側の端部は尖り気味に仕上げている。外面にスマキ痕はみられない。これ以外にも③層からは轆羽口片が出土しているが、いずれも小片である。

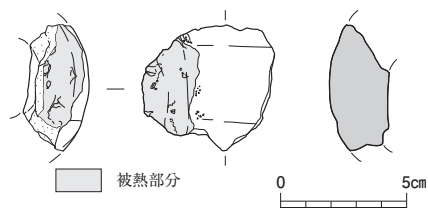


図171 第204-7次調査出土鍛冶関連遺物 1 : 3

その他 ③層から石錐 1 点、①・②層からサヌカイト製の剥片、石英が出土した。

(松永悦枝)

4 まとめ

本調査区からは、奥山廃寺に関連する建物等の明確な遺構は検出できなかったが、以下に示す 3 つの成果を得ることができた。

1 点目は、旧地形を平坦にする古代の大規模な整地層 (③層) を確認したことである。③層は調査区内では北西に向かって厚く堆積することを確認している。調査区周辺の旧地形を示す地山面の高さは、本調査区では標高 94.00m 付近であるのに対し、調査区からわずか 3 m 南に隣接する奥山久米寺1995-1次調査Ⅳ区では標高 94.70 m 付近で確認されている (『藤原概報 26』)。このことから、本来の地形は、本調査区と奥山久米寺1995-1次調査Ⅳ区の間で急な斜面地となる様相が復元できる。このような地形を大規模に造成する契機は、奥山廃寺の造営に関わる可能性がきわめて高い。③層に 7 世紀前半の土器が含まれる一方で、瓦がほとんど含まれないことも寺院造営段階の造成であることを裏付けている。奥山廃寺の寺域北辺の様相はいまだ不明な部分が多いが、③層の存在から、少なくとも調査地周辺は寺域内に含まれることが推定できる。

2 点目は、鉄滓や轆羽口等、鉄生産に関する遺物が出土したことである。これらは遺構にはともなっておらず、時期や詳細な様相は不明である。しかし、③層から出土していることから、7 世紀前半以前に鍛冶工房などの施設が調査区周辺に存在した可能性が指摘できる。

3 点目は溝状遺構SX407や斜行溝SD406など、小規模ながらも 5 世紀代に遡る可能性のある古墳時代の遺構を確認したことである。周辺では、調査区より約 20m 東の小規模調査において、古墳時代の溝が確認されている (『藤原概報 4』)。本調査区においても、奥山廃寺造営前の当該地の土地利用の一端を知る基礎材料を得ることができた。

(石田)